

実録 「広島原子爆弾より救われたいのち」

藤田 稔

太平洋戦争中、未来の陸軍大將を目指して難関の陸軍幼年学校を突破して、広島陸軍幼年学校（以下広幼と略す）に入学したのは昭和20年（1945）4月1日、私が15歳の時であった。

陸軍幼年学校は全国に6校すなはち仙台、東京、名古屋、大阪、広島、熊本にあり、全国の定員2000名に対して10万人の受験生があり、競争率は50倍であった。

なぜこのように人気があったかという点、陸幼3年間の教育（全寮制、全国費負担）が終了すると、東京の陸軍士官学校に無試験で進学でき、21－23歳で卒業すると少尉に任官される。各連隊に配属され、優秀な将校には特別に陸軍大学受験の推薦が行なわれる。陸軍大学を優秀な成績で卒業すると、陸軍の重要なポスト（参謀本部など）に配属され、業績をあげると陸軍大將への道が開けてくるのである、

私たちは広幼第49期生でいわば最後のKADET（将校生徒）であった。第一訓育班より第四訓育班まで総員256名であった。上級生に47期生、48期生がいて全寮制であり、経費はすべて国費でまかなわれていた。

400Mトラックを有する広い運動場、肇国神社、大講堂、剣道場、柔道場、将官集会室、生徒集会所、各教室、大食堂および本館（本部）が整然と配置されていた。

いま回想しても広幼の教育は極めて理想的で素晴らしいものであったと思われるのであった。

ハード面ではまず一日のスケジュールがキッチリ決められていて、極端に言えばそれこそ1分、1秒の単位で狂いもなく運営されていた。

参考のために昭和20年4月当時の一日のスケジュールを簡単に示す。

6時20分 起床、7時15分 朝食、8時－12時 学科授業、1クラス 30名、数学、物理、化学、外国語（ドイツ語またはロシア語）、12時15分 昼食、午後は13時20分－15時20分 道徳、倫理、歴史、15時20分－16時20分 自由体操、16時40分－18時 随意自習、勉強、18時 夕食、19時－22時 軍歌練習、自習、勉強、日記、22時 就寝。

広幼ではソフト面の教育がまた素晴らしかった。私の配属された第一訓育班の生徒監は松倉 靖 少佐でいわば父親がわりになっていろいろと面倒を見てくださった。私たちは「おやじ」と呼んで尊敬し、親しく指導していただいた。

松倉少佐は東南アジアの戦線で弾雨をくぐってきた歴戦の勇士であったが、そのようなことは一切自慢話することもなく、いつもおだやかな方で慈愛の目をもって私たちを育てて下さった。

第一訓育班は生徒総数64名であり、1号寝室から4号寝室まで16名ずつ4つの部屋

に分かれて起居していた。寝室で隣り合わせのベッドで休む生徒を寝台戦友といい、何かと助け合うのである。

私は3号寝室に配属され、寝台戦友は岡山出身の井筒 三喜君であった。井筒君は真面目で誠実な人であった。戦後、東京医科歯科大学を卒業して歯科医となり、北海道岩内郡岩内町で開業していたが、病を得て六十歳の若さで旅立たれたのは返す返すも残念である。

さて、各寝室には47期生（最上級生）から選ばれた模範生徒が一人ずつ配置されていて私たちと起居を共にしていた。この制度は非常に素晴らしいものと思う。西も東もわからない私たち新入生にとって模範生徒の存在は非常に有難いものであった。

3号寝室の模範生徒は大藪輝雄さんであった。手を取り足を取りとは正にこのことではないかと思われるほど親切に、丁寧に私たちを導いて下さった。いわば兄のような存在であった。47期の通常の学科、授業を受けながら、体育、訓練も行い、かつ私たち3号寝室16名の健康状態の観察、各学科の質問への回答、心配事その他の相談にのって下さるのである。まさに超人的な能力が必要とされるのであり、大藪模範生徒はこれらをすべてこなしていた。今想起しても自然に頭が下がる。

大藪さんは香川県の丸亀中学校から広幼に入った英才で、戦後、立命館大学経済学部の教授をされていたが、病を得て早世されたのは無念の極みであった。平和になった日本で昔をなつかしみながらゆっくりとお話が出たかった。

このように私達は寝台戦友、兄のような模範生徒、親父のような生徒監、そしてこまごまと面倒を見てくれる下士官（田端 繁 伍長）にかこまれ、大家族主義の中で、まるで温室栽培のように大切に育てられたのであった。

陸軍幼年学校の生徒は15歳—17歳の文武両道の少年達から成り、正に陸軍の幹部将校へのエリート集団であったといえよう。その教育方針は明治天皇発布の「教育勅語」を原典とし「軍人勅諭」が基本になっている。広幼の校訓は「敬神崇祖」、「剛健闊達」であった。

このように陸軍幼年学校の教育はハード面からみても、ソフト面からみても正に理想的な教育内容であった。このような教育制度が現代に存在していれば、非行生徒や不登校生徒や暴力生徒やいじめなどの問題は無くなるのではないだろうか。

教育の原点は愛にあると信じてやまない。これは私のひとりよがりでは無い。軍事作家、国分康孝氏は1997年講談社より「範は陸幼にあり—真の人間教育とは—」を出版されたが、陸軍幼年学校の教育制度を模範として讃えている。

また、軍事作家、藤井非三四氏も長い日本陸軍の歴史の中でも陸軍幼年学校の教育制度はベストであったと断言している。

さて太平洋戦争の戦局われに利あらず、昭和20年3月10日、5月24—26日東京都はB 29の爆弾、焼夷弾による無差別攻撃により焼野原になった。また名古屋市も昭和20年3月19日にB 29の攻撃により焼野原になった。大阪市は昭和20年6月7日B 29の空襲により焼野原になった。

このような情勢にかんがみ、当時の陸軍大臣 阿南惟幾（あなみこれちか）陸軍大将（広幼 第四期生）は、軍務、政務の超多忙の中、後輩である広幼生の身を案じ、当時の広幼校長 田端 八十吉 少将に直接電話をかけ広幼全員の疎開を命令したのであった。

阿南惟幾大臣としては、今まで全く無傷の広島市に大型爆弾が投下されて大被害が出ると思われたのかも知れない。

疎開先は1年生（49期生）は広島県比婆郡庄原町へ、2年生（48期生）は同県甲奴郡上下町へ、3年生（47期生）は同県高田郡吉田町へ、昭和20年6月9日に整せい肅々と移動したのであった。

阿南陸軍大臣のこの英断が8月6日の広島原子爆弾から、われわれ若き将校生徒660人と文武教官50人、事務官50人合計710人の命を救ったのである。

この尊き歴史的事実はあまり世に知られていない。

しかし、私にはさらに過酷な運命の足音が近づいてきていたのであった。私の実体験は古今未曾有のものであると思われる。

さて、私達広幼生徒は疎開先の国民学校あるいは中学校の体育館や講堂を借りてマットと毛布を敷いて寝泊りし、教室を融通し合って授業がつづけられたが、広幼生徒の士気はいささかも低下することはなかった。

昭和20年8月1日から7日までの1週間夏期休暇が与えられた。しかし、海を渡っての帰郷（四国、九州など）は船が撃沈される危険性があるので許可されなかった。

私は広島市内に伊藤新造さん（家庭裁判所勤務）という同郷新居浜市垣生出身の知人がいたのでそこを訪ねることにした。

夏らしい暑い晴れた日がつづいていた。奥様は伊藤清子さんという美しい方で広島市の女学校の国語の先生をされていた。伊藤さんのお宅で毎日のんびりと過ごさせていただき、ご馳走にあずかっていた。あの運命の日が足音も無く近づいていることを誰も知る由もなかった。

広幼の数学の教官で同郷新居浜市垣生ご出身の佐々木右左先生が伊藤さん宅を訪ねてこられたのが8月4日の午後のことで、その夜は豪華な夕食で楽しい時を過ごし、先生と私は同じ蚊帳の中で就寝した。先生は「藤田君、明日は吉田の私のところに来ませんか」とお誘いくださった。私は「はい、喜んでお伺いいたします」と答えた。蒸し暑い夜であった。先生に「戦局はどうなるのでしょうか」などとお話しているうちに、私は深い眠りにおちいった。

8月5日の夕方、先生と私は伊藤家を辞して、広島駅から芸備線に乗り、広島を離れたのであった。伊藤さんご夫妻が名残り惜しそうに、ホームでいつまでも手を振って見送って下さったのが、いまだに臉に焼き付いて離れない。

先生と私は貨物列車にゆられて、高田郡吉田町の疎開先のお宅に夜おそく着いた。広島から50Km ほど離れた小さい町である。

8月6日、運命の日が来た。

先生ご夫妻と私が朝食をとっていた午前8時15分、一瞬部屋の中にうすい紫色の稲妻が光った。私達は顔を見合わせ庭へ飛び出した。そして見た、あのキノコ雲を。

それは白昼の悪夢のように真っ青な日本晴れの天空へゆっくりと盛り上がっていった。

私は80年経過したいまでも当時のことを鮮明に思い起こすことができる。私は人間の運命について深く考えさせられる。

もし、佐々木先生が伊藤さん宅へいらっしゃらなければ、私は8月6日まで滞在したであろうから、原爆にあってこの世にいないであろう。(夏期休暇は8月1日から7日まで)

また、もし私が伊藤さん宅を訪問していなければ、佐々木先生は8月6日まで滞在されたであろうから、原爆にあり、この世にはおられないであろう。この幸運な偶然を私はなんとやって表現してよいかわからない。

この世に運命というものがあるのか？ それは必ずあると言えよう。

この世に神というものがあるのか？ それは必ずあると言えよう。

私は15歳にしてこれ以上のおかげは無いほどのおかげを頂いたのである。

幸運の女神は私に微笑んだ。それはコツコツと努力してきた私へのご褒美かも知れない。

この神様のおかげに報いるべく、私はより深く信仰の心を高め、世のため、人のために尽くしてゆこうと固く決意したのであった。

8月6日午前8時15分の原子爆弾により、広島市基町にあった広島陸軍幼年学校のすべての施設は全壊、消失した。私がお世話になった広島市内の伊藤新造さんのお宅は全壊し、ご主人は原爆病で逝去され、奥様の清子さんは原爆病で長期入院後、旅立たれた。

広島市民は昭和20年12月末までに爆風、輻射熱、電離放射線の三要素の複合作用により約14万人が亡くなられた。また放射線の作用により数年後または数十年後に白血病などにかかり亡くなられた方も多い。80年経過した現在でもなお原爆病で苦しんでおられる方が多い。

世界人類の平和のために、核の使用は絶対に禁止しなければならない。

広幼の素晴らしい教育、訓育、鍛錬によって私の肉体と精神の基盤がこの時期に形成されたといっても過言ではないであろう。

広島原子爆弾より、阿南惟幾陸軍大臣および佐々木右左教官に命を救われたことを心から感謝するとともに、この尊い命をこれからも大切にし、世のため、人のために尽くしてゆこうと決意を新たにしている。

石油分析化学研究所 研究所長

工学博士(大阪大学) 技術士(化学部門)

藤田 稔

2025年6月1日